

展 望

進路に関する自己効力研究の発展と課題

廣 瀬 英 子^{1,2}

本論文はこれまでの進路に関する自己効力の研究を取り上げた展望論文である。自己効力理論を進路関連の領域に応用したキャリア・セルフエフィカシー研究は Hackett & Betz (1981) が女性の進路発達を理解するために自己効力理論からアプローチしたことに始まった。その後研究の関心は進路選択に対する自己効力、進路選択過程に対する自己効力、進路適応に対する自己効力の三分野に向けられてきた。進路選択に対する自己効力とは、自分の進路選択についてどのような分野に対してどの程度自信を持つかを指す。初期の頃は男性中心の職業・女性中心の職業に対する自己効力の性差を論じていたが、最近では Holland や Kuder などの職業興味理論に基づいた興味分類に対応した形での自己効力の測定と、関連する要因とのつながりの研究に発展している。進路選択過程に対する自己効力とは、進路を選択していく過程そのものについての自己効力を指し、Taylor & Betz (1983) に代表されるいくつかの尺度が開発され、また進路不決断など他の要因との関連が注目されている。進路適応に対する自己効力とは、選択した職業に適応し満足や成功を得ることについての自己効力であり、まだあまり研究が蓄積されていないが、進路決定後の適応状況を予測できるという意味で重要である。今後の課題としては、新たに Lent, Brown & Hackett (1994) の社会・認知的進路理論で提唱された、職業興味・進路選択・進路に関わるパフォーマンスについての3モデルの実証的な検証を進めること、これまで用いられてきた様々な測定尺度を見直して信頼性・妥当性を検討すること、性差の比較から個人差の比較へと重心を移すことなどがあげられる。さらに、研究対象者の拡大や縦断的研究、進路指導・進路カウンセリングでの自己効力理論の応用、進路適応に対する自己効力の研究の充実が期待される。

キーワード：自己効力、進路選択、進路選択過程、進路適応、進路指導。

Bandura (1977) の提唱した自己効力 (self-efficacy) 理論は、これまで多岐にわたる分野において応用研究が進められてきた (Lent & Hackett, 1987)。1988年までの研究については竹綱・鎌原・沢崎 (1988) にまとめられている。自己効力理論を進路関連領域の研究に取り入れたキャリア・セルフエフィカシー (career self-efficacy) 研究は、1980年代初頭からアメリカで発達し、今やひとつの研究領域として確立したと言えよう。本論文では自己効力研究の中でもキャリア・セルフエフィカシー研究に限定してこれまでの発展動向を展望する³。なお、“career self-efficacy”は文字通り訳せば“進路に関する自己効力”となるが、原語表現のままの方がわかりやすいので、本論文では“キャリア・セルフ

エフィカシー”と表記することにする。

キャリア・セルフエフィカシー研究が生まれた経緯

自己効力とは、社会的認知理論 (Bandura, 1986) の中核となる概念のひとつで、ある課題を遂行できる可能性についての自分自身の判断を指す。これは、課題遂行のために必要な技能を持っているかいないかに拘らず、出来ると思うかどうかを問うものである (Bandura, 1986)。自己効力は行動に直接的に影響を与えると仮定されており、ある特定の課題に対する自己効力が高ければ、その課題に対して頻繁に働きかけ、それが良い結果にもつながり、逆に自己効力が低いと、課題に応じた行動を避けるようになり、従って得られる結果のレベルも落ちることが予測される。自己効力は、課題の遂行にあたりどれだけの努力をし、障害にあってもどれだけ耐えられるかを決定するとされている。また、自己効力は操作可能であり、従って行動を変容させることもできるとされている。

¹ 東京大学大学院教育学研究科

² 旧姓 池田

³ 文献資料は、PsycINFO の記載を手がかりに主要心理学専門誌・専門書所載のものとし、学会発表・未公刊資料は含めていない。

この自己効力を進路関連領域に応用したキャリア・セルフエフィカシー研究は、Hackett & Betz (1981) が女性の進路発達を理解するために自己効力理論からアプローチしたことに始まった (Hackett, Lent & Greenhaus, 1991; Hackett & Watkins, Jr., 1995)。女性が今までの社会的経験から男性中心の職業に対して低い自己効力を持っていることが、自己の可能性の過小評価につながり、そういった職業を選択・追求することへの障害になっているのではないかと問題提起したのである。これが出発点となってキャリア・セルフエフィカシー研究は次第に拡大し、現在では内容的に大きく3つに分類することができる。3つとは、進路選択 (career choice) に対する自己効力、進路選択過程 (career choice process) に対する自己効力、そして進路適応 (career adjustment) に対する自己効力である。次節以降、この三分野の概要を説明していく。この広い視野を内包するキャリア・セルフエフィカシーは、進路選択や適応の過程に必要な行動に関する自己効力、と定義されている (Betz & Hackett, 1986)。

なお、一言付け加えれば、キャリア・セルフエフィカシー研究は学校の教科科目に対する自己効力の研究とも無縁ではない。キャリア・セルフエフィカシー研究の始まった当初から、大学での専攻を決める段階で、数学に対する自己効力が低い場合、数理系の分野が専攻としての考慮の対象から外れてしまうのではないかと危惧され、数学に対する自己効力 (math self-efficacy) が論じられるようになった。こちらの分野も Betz & Hackett (1983) に始まり、Pajares & Miller (1995) や Fouad & Smith (1996) などへと確実に発展してきている。

進路選択に対する自己効力

職業名で問う自己効力

進路選択 (career choice) に対する自己効力とは、自分の進路選択について、どのような分野に対して自信を持っているかを指す (Betz & Hackett, 1986)。ここで言う進路選択は具体的な職業の選択と、その職業に就くために必要な教育の選択の両方を指すことが多い。Betz & Hackett (1981) は、伝統的に女性が中心となる職業と男性が中心となる職業の職業名 (occupational title) を10種類ずつ取り上げ、大学生に対してその職業の義務やその職業に必要な学業を成し遂げる自信の程度を訊ねた。その結果、男性は男性中心の職業に対しても女性中心の職業に対しても同程度の自己効力を示す一方、女性は女性中心の職業に対しては男性より高

い自己効力を示すが、逆に男性中心の職業に対しては男性より低い自己効力を示した。Post-Kammer & Smith (1985) は同じ調査を中学生に対して行い、大学生の場合よりも性差のある職業が未だ少数であることがわかった。Matsui, Ikeda & Ohnishi (1989) は、Betz & Hackett (1981) に準じた日本版の尺度にて日本でも Betz & Hackett (1981) と同様の結果が得られることを示し、また自分を女性的だと認知していたり、数学に対する自信が低かったり、男性中心の職業で成功した女性は少ないとっていたりする女性は、男性中心の職業に対する自己効力が低いことを明らかにした。さらに Matsui (1994) は、男性中心の職業に対する自己効力は性役割の自己概念のうち男性性と関連があり、女性中心の職業に対する自己効力は男性性・女性性ともに関連があることを示した。Scheye & Gilroy (1994) は変わった着眼点を持ち、女子高・女子大で男性の教師に感銘を受けた女性は男性中心の職業に対して高い自己効力を持つことを指摘した。これら20の職業は、後に時代の変化に合わせて男性中心・女性中心・男女半数の何れかに分類されて使われる場合もある (Kelly, 1993)。

Betz & Hackett (1981) の選んだ20の職種以外にも、代表とする職業の取り上げ方はいくつかある。Wheeler (1983) は男性が占める割合の大きさに応じて段階的に17の職業を取り上げ、男性・女性とも男性中心の職業で成功するのは難しいと考えているが、女性の方が一層強くそのように考えていることを明らかにした。Clement (1987) は Betz & Hackett (1981) や Wheeler (1983) の尺度には不十分な点があるとして独自の尺度を作成し、女性が男性中心の職業には男性より低い自己効力を持つことを示した。Hannah & Kahn (1989) では職業の持つ社会的評価も考慮して職業を選び、男性・女性とも自己の性別と対応する職業に対して高い自己効力を示すことが確認された。Bonett (1994) は Bonett & Stickel (1992) の18の職業からなる尺度を用い、女性中心の職業に対する自己効力について性別と婚姻形態との間の交互作用を確認し、また Stickel & Bonett (1991) では女性が男性中心の職業よりも女性中心の職業に対して“家庭と仕事を両立させることへの自己効力”を持っていることを示した。

職業選択に対する自己効力の重要性は、他の様々な要因との関連で確認されてきた。Lent, Brown & Larkin (1984) は15の科学工学専門分野について、職業の持つ義務及びその職業に就くのに必要な学業を成し遂げることにに対する自己効力を見たところ、学業を完了す

ることについての自己効力が高い人は、1年後に高い成績と粘り強さを見せることがわかった。さらに Lent, Brown & Larkin (1986, 1987) は学業のみに焦点を絞り、自己効力が成績と粘り強さ、考慮する職業の幅の広さを予測できることを示した。

職業興味との関連を見たものも多い。Betz & Hackett (1981) と Post-Kammer & Smith (1985) は男性中心・女性中心の職業に対する興味は各々に対する自己効力に関連があることを示した。Rotberg, Brown & Ware (1987) は男性中心・女性中心・男女半数の職業を均等に5つずつ取り出し、職業に対する興味と性役割の自己概念(男性性, 女性性, 両性性など)が自己効力に影響を与えていること、職業興味と自己効力が考慮する職業の幅の広さに影響していることを明らかにした。

Lapan, Boggs & Morrill (1989) は職業興味尺度 Strong-Campbell Interest Inventory(SCII)と、それに対応するいくつかの職業名への自己効力を訊ね、SCIIの6つの興味分類(Hollandの職業選択理論に沿ったもの)の中でも男性が女性より高得点を示すとされている現実型, 研究型の得点と、それぞれに対応した自己効力には関連が見られることを示した。Lent, Larkin & Brown (1989) は単に職業興味尺度 SCIIで得られた興味得点と科学工学分野への自己効力との関連を確認している。

職業内容で問う自己効力

これまでは自己効力を職業名を提示することによって測定していたが、自己効力の概念が“個々の内容に対応する(task-specific)”と仮定されていることを考えれば、職業の具体的な内容(occupational task)で訊ねる方が、職業名で代表させるよりも望ましい(Osipow, 1991)。この考えに合う尺度はLent et al. (1986)において最初に用いられたが、Matsui & Tsukamoto (1991)以降本格的に定着した。Matsui & Tsukamoto (1991)は、職業名に対する自己効力に平行して具体的な職業内容に対する自己効力も測定し、職業内容で訊ねても職業名で訊ねると同等の結果が得られることを確認している。

Matsui & Tsukamoto (1991) はまた Holland の職業選択理論の6つのモデル環境(現実型, 研究型, 芸術型, 社会型, 企業型, 慣習型)による職業分類を取り入れた。それまでは Betz & Hackett (1981) に見られるような数少ない職業に対する反応によって“職業選択に対する自己効力”が測定されてきたが、一般性を論じるには物足りない。一方あらゆる職業を網羅するように、例え

ば *The complete guide for occupational exploration* (Farr, 1993) や *Dictionary of Holland occupational codes* (Gottfredson & Holland, 1996) に掲載されているすべての職業を提示しようとしても膨大な数になる。その点、進路発達理論に基づく分類の枠組みに対する自己効力を問うのは合理的である。T. Matsui らはこの尺度を用いて女性一般職員に対して、性役割の自己概念の違いによる自己効力の違いや (Matui & Onglatco, 1991), 仕事上のストレスと疲労の関係に対する自己効力の影響を検証している (Matsui & Onglatco, 1992b)。

Betz, Harmon & Borgen (1996) もまた Holland の6つの分類に合わせて職業内容(ここでは教科名も含む)を問う尺度を作成し、同じく Holland の職業分類に基づいている興味尺度 Strong Interest Inventory (SII) の結果と比較し、各分野に対する興味と自己効力には各々関連性があることを確認した。Lenox & Subich (1994) も同じ興味尺度 SII の中の現実型, 研究型, 企業型の得点のみに注目し同様の結果を得ている。

Lucas, Wanberg & Zytowski (1997) は Matsui & Tsukamoto(1991)と同様の手続きで、Kuder の職業興味理論に基づいた10の興味分野に対応する自己効力尺度を構成している。Tracey(1997)は、興味の球形モデル(spherical model)の8つの職業分類に、職業内容に対する自己効力もあてはまることを確認している。Whiston (1993) は大まかに対人的な仕事とものを扱う仕事に対しての自己効力を訊ね、職業に就く女性がものを扱う仕事より対人的な仕事に対して高い自己効力を持つことを示した。Rooney & Osipow (1992) は230もの職業内容に対する自己効力を調べ、より広範囲に応用できる尺度作りを目指したが、既存の興味理論やモデルに基づいていないことで支持が得られていない。今後、職業興味理論に合わせた自己効力尺度を用いて他要因との関連性の追求が進められていくと思われる。

進路選択過程に対する自己効力

進路選択過程(career choice process)に対する自己効力とは、ある特定の分野を自分の進路として選択する過程そのものについて、どの程度自信を持っているかを指す。進路選択に対する自己効力と違うのは、どのように選択をするか、という進路選択の過程において必要となる具体的な行動に対して焦点を当てている点である (Betz & Hackett, 1986)。

進路選択過程に対する自己効力の研究は Taylor & Betz (1983) から始まった。ここで作成された Career Decision-Making Self-Efficacy Scale (進路選択に対す

る自己効力尺度：以下、CDMSE 尺度）は、大学生の進路選択の過程において重要と考えられる 5 つの要因、自己認識、職業情報の収集、目標選択、将来設計、課題解決についての自己効力を訊ねる 50 項目からなるものであるが、5 つの要因に対応するように仮定した因子間の相関が非常に高く、全体としてひとつの要因を測定しているという印象がある。Robbins (1985), Taylor & Popma (1990) も、この CDMSE 尺度は 5 つの独立した進路選択行動というよりも進路選択行動全般についての自己効力を測定したものであるとしている。

Abdalla (1994, 1995), Gianakos (1995) は性役割の自己概念の違いによって進路選択過程に対する自己効力の程度にも違いが見られると述べている。また 25 歳以上になってから大学に入学してきている学生や、自分の進路について家庭の事情で何らかの障害を経験した学生は高い自己効力を持つことが示されている (Gianakos, 1996 ; Luzzo, 1993a, 1996b)。前節で取り上げた進路選択に対する自己効力との関連では、女性の中でも進路選択過程に対する自己効力が高い方が男性中心の職業に対する自己効力も高いこと (Nevill & Schlecker, 1988) が明らかにされている。

他の要因との関連については、Bergeron & Romano (1994) と Mathieu, Sowa & Niles (1993), Taylor & Betz (1983) は進路不決断との関連, Robbins (1985) は進路不決断, 自尊感情, 特性不安などとの関連, Taylor & Popma (1990) は進路不決断, 進路に対する重要性 (career salience), 自己統制感 (locus of control), 考慮する職業の幅, 職業選択に対する自己効力との関連に着目し、進路選択過程に対する自己効力は特に進路不決断と強く関連があることが示された。他にも高校での特別課外活動との関連 (Carns, Carns, Wooten, Jones, Raffield & Heitkamp, 1995), 進路選択に対する態度との関連 (Luzzo, 1993b, 1993c, 1995), 進路探索行動との関連 (Blustein, 1989), 人生に対する姿勢や仕事に対する動機づけとの関連 (Niles & Sowa, 1992), 家庭内の家族関係との関連 (Whiston, 1996), 大学での学年や年齢との関連 (Luzzo & Ward, 1995) など数多くの要因が取り上げられている。

CSMSE 尺度は比較的項目数が多いので、その半数のみが使われて進路選択や進路指向を予測する要因のひとつとされたり (Fassinger, 1990), 性役割態度を予測する要因のひとつに加えられたりしている (Ahrens & O'Brien, 1996)。同じく半数の項目を用いて、女子高校生の進路選択に対する不安と大学進学動機との関係への影響 (Matsui & Onglatco, 1992a) や、両親との愛着・分

離との関連性 (O'Brien, 1996) が確認されている。

進路選択過程に対する自己効力は主に CDMSE 尺度で測定されてきたが、近年になって内容が再検討され始めた。Solberg, Good, Nord, Holm, Hohner, Zima, Heffernan & Malen (1994) は、職探し・転職・再就職まで幅広く考慮して、職業探索, 面接, ネットワーク作り, 自己価値探索の 4 因子からなる Career Search Efficacy Scale (求職に対する自己効力尺度) を作成し、個人のパーソナリティ特性と進路関連行動の関係への影響を確認している (Solberg, Good, Fischer, Brown & Nord, 1995)。Pickering, Calliotte & McAuliffe (1992) は進路選択行動をレディネス, 自己評価, 情報検索, 進路決定, 仕事の遂行の 5 つの観点から測定する Career Planning Confidence Scale (進路設計に対する自信尺度) を開発している。Kanfer & Hulin (1985) は解雇された後の職探し行動に対する自己効力に限定し、その自己効力が高い方が結果的に再就職先が決まりやすいという結果を得ている。

浦上 (1993) は、Taylor & Betz (1983) の CDMSE 尺度を日本の風土に合うように置き換えた“進路選択に対する自己効力尺度”を発表している。これは浦上 (1995a) まで改訂が重ねられ、高校生の進路成熟との関連 (浦上, 1993), 女子短大生の職業不決断との関連 (浦上, 1995a, 1995b), 女子短大生の進路選択過程に対する自己効力の、実際の進路選択行動である就職活動と自己概念への影響 (浦上, 1996a) や自己成長力への影響 (浦上, 1996b), 就職活動・内定状況・就職後の職場適応への影響 (浦上, 1994) など様々な要因との関連性が確認されている。同様に古市 (1995) は CDMSE 尺度をもとにした自己適性評価, 計画立案, 職業情報収集, 困難解決の 4 因子からなる“進路決定効力感測定尺度”により、職業忌避的傾向との関連を見ている。富安 (1997a) は CDMSE 尺度の他複数の尺度をもとに進路選択, 情報収集, 自己評価, 計画立案, 問題解決に対する自己効力を訊ねる“大学生用進路決定自己効力尺度日本語版”を作成し、実際の進路決定行動との関連, また未来に対する時間的展望や未来イメージとの関連 (富安, 1997b) を確認している。

進路選択過程に対する自己効力の研究においては、進路選択に対する自己効力の場合と同様、他要因との関連性を体系的に解明する研究の一層の充実が必要とされている。

進路適応に対する自己効力

進路適応とは、Betz & Hackett (1986) によれば、

進路を選択し、その選んだ職業において満足と成功を得ることを指す。自己効力を進路適応場面にも応用できるという可能性は Betz & Hackett (1986) や Lent & Hackett (1987) で指摘されているが、研究そのものはあまり進んでいない。

この分野はその性格上、既に職業に就いている人に対する研究が大半を占める。初めに自己効力の概念を応用したのは Barling & Beattie (1983) であり、保険営業職の人々の保険セールスに対する自己効力とセールスの実績に関連があることを示した。Hackett, Betz & Doty (1985) は基礎研究としてアカデミックな専門職につく女性にとって必要と考えられる資質を具体的な聞き取り調査によりまとめた。Betz & Hackett (1987) はその研究から得られた知見をもとに、進路の追求の問題も含めて大学生が直面する色々な状況に対しての自己効力の測定尺度を作成した。Schoen & Winocur (1988) は大学の研究者に対して、研究、教授、学校運営等の仕事に対する自己効力を調査した。Landino & Owen (1988) も同様に研究、教授、サービスの3要因に対する自己効力を調査し、研究に関する自己効力には有意な男女差が検出された。さらにこれを発展させて Vasil (1992) は、自己効力と研究業績、研究の成功に対する原因帰属と自己効力にはそれぞれ関連があることを示した。Bush, Powell & Herzberg (1993) は進路カウンセリングを行う臨床専門家に必要な自己効力を論じている。

その他には、新しい仕事につくことに対する自己効力の違いが就職後の適応の仕方に影響を与えることを示した研究 (Jones, 1986) や、異色のものでは、退職に対する適応についての自己効力の低さが退職することへの不安を予測するという研究もある (Fretz, Kluge, Ossana, Jones & Merikangas, 1989)。

このように進路適応に対する自己効力の分野の研究は守備範囲が広いため、バラエティに富んではいるものの表面的な段階にとどまっている。

キャリア・セルフエフィカシー研究の問題点と今後の課題

キャリア・セルフエフィカシー研究の概要を、進路選択について、進路選択過程について、進路適応についてと内容的に三分野に分けて紹介してきた。全体を通しての問題点・今後の課題として次の3点があげられる。

社会・認知的進路理論によるとらえ直し

三分野に共通して言えることとして、自己効力に影

響を与える要因や自己効力が影響を与える要因、つまり自己効力に関連する要因間のつながりの明確化・体系化の必要性があげられる。Lent, Brown & Hackett (1994) は Bandura (1986) の社会的認知理論の枠組みを基盤としながら職業発達の流れを図式化し、社会・認知的進路理論 (social cognitive career theory : SCTT) としてモデル化した。これは既存の進路発達理論を統合する意図を持つ (Lent & Brown, 1996) ため、進路発達を説明するモデルとしての一般性が期待できる。

このモデルは、Bandura (1986) の三者相互モデル (triadic reciprocal model) に示されている人・外的環境・行動が相互に影響し合う関係を念頭におき、自己効力・結果期待、その両者の影響で設定される目標といった社会認知的変数と、外的サポートや障害といった環境変数、さらに性別・人種・身体的健康などの変数も用いて、進路に対する興味、進路の選択、進路に関わるパフォーマンスを各々説明するものである。

進路に対する興味の発達のモデルは次のような循環型である。人はある行動に対してうまく出来そうだという良い自己効力と価値ある結果をもたらしそうだという結果期待を持つと、その行動に対して興味が湧き、より高い目標を決める。この目標を実現するための行動はやがて成功(または失敗)につながる。そのことがまた自己効力や結果期待を新たに書き換えるというものである。自己効力には個人の能力が、また結果期待には地位や給料といったその職業の社会的評価も付随して影響するとされている。

しかし現実には様々な制約要因が働き、たとえある職業に興味を持っても必ずしもそれを選択できるとは限らない。進路選択モデルでは、職業の選択に影響を与えるものとして興味以外に経済的変数・個人の持つ文化的背景・偶然性などの変数を取り込んでいる。

パフォーマンスモデルは、職業に対する興味や選択より日常的な具体的な作業 (学校で単位を得るなど) の過程をモデル化したものである。そこでは個人の能力がパフォーマンスに対して直接、または自己効力や結果期待の要因を通して間接的に影響を与える。自己効力や結果期待はパフォーマンスに対する目標の高さにも影響を与えるとされている。パフォーマンスの結果はまた自己効力や結果期待に影響するのでこのモデルも循環を繰り返すことになる。

この3つのモデルに対して合計12の仮説が立てられており、自己効力と職業興味、進路選択、パフォーマンスとのつながりの細部を規定している。(モデル・仮説の詳細については Lent et al.[1994]を参照されたい。) これまで

の研究で明らかになっていることはこのモデルに当てはめると仮説の一部に過ぎない。仮説の中には時系列的なものも多いだけに検証するのは容易ではないが、縦断的に研究の積み重ねによってモデルを実証していく必要があろう。

性差に対する意識

これまでに取り上げた研究を性差の観点から見てみると、男女差の有無の明確化を目的の1つに掲げているものが非常に多い。全般に自己効力に性差が認められた研究が多く、進路選択過程に対する自己効力 (Bergeron & Romano, 1994; Luzzo, 1993b, 1993c; Luzzo & Ward, 1995; Solberg et al., 1994; Taylor & Betz, 1983; 浦上, 1993; 富安, 1997a, 1997b) や工学・科学系分野を既に専攻している学生の進路選択に対する自己効力 (Lent et al., 1984) については性差が見られなかった。進路適応に対する自己効力については性差が見られたもの (Landino & Owen, 1988) と見られなかったもの (Betz & Hackett, 1987; Schoen & Winocur, 1988) とが混在している。

前述のように、もともとキャリア・セルフエフィカシー研究は、男性中心の職業を選択し持続させていく女性が少数にとどまっている原因に注目したことから進展したため、性差を論ずる研究が多いのは必然である。男性のみを対象とした研究が見られない反面、女性のみを対象とした研究は数多い (Ahrens & O'Brien, 1996; Foss & Slaney, 1986; Hackett et al., 1985; Mathieu et al., 1993; Matsui & Onglatco, 1991, 1992a, 1992b; Nevill & Schlecker, 1988; O'Brien, 1996; Scheye & Gilroy, 1994; 浦上, 1994, 1995a, 1995b, 1996a, 1996b; Whiston, 1993 など)。

基礎的な結果がある程度揃い、特性としての男女差が確認出来てきたことは意味のあることである。しかし、もはや研究結果を示して女性だからこのようなことになる、と強調する時期ではなくなっているであろう。今後の課題としては、ひとつは最近試みられているように性役割の自己概念に着目して解析すること (Abdalla, 1994, 1995; Gianakos, 1995; Matsui, 1994; Matsui & Onglatco, 1991; Rotberg et al., 1987 など)、もうひとつは、性差という予備的情報に固執せず、個々人の特定の課題に対する自己効力が絶対的に高いのか低いのかを知り、その程度の違いがその後の行動にどのように影響を及ぼすのかという点に重点をおくことが必要と考えられる。

測定尺度の整理

既出のキャリア・セルフエフィカシー関連の尺度を簡略にまとめたものがTABLE 1である。自己効力が、特定の場面・状況ごとに特定の行動に影響を与えるも

のである、とされているため、個々の研究ごとに目的に合わせた尺度を構成する必要がある。また場面や状況は同じであっても、どのようなレベルまで掘り下げて詳しく測るべきなのかという点も、研究の目的により異なってくる。そのせいもあって次第に尺度の種類が増加してきたが、その場限りの尺度となってしまう、後の研究で全く使われていないものも少なくない。Osipow (1991) は、多くの尺度が信頼性・妥当性の検証が不十分のままであると指摘している。積極的に信頼性・妥当性をテーマにしているのはRobbins (1985), Luzzo (1993b, 1996a) などわずかである。Betz (1992a) は特に構成概念妥当性、弁別的・予測的妥当性を重視するように注意を促している。ここで改めてキャリア・セルフエフィカシー研究において既にどのような尺度が構成されているのかを確認し、研究目的に沿う尺度は再度使用して結果を蓄積し、信頼性・妥当性とも追求していくべきであると思われる。またLuzzo (1996a) の指摘するように、対象年齢の拡大、民族性 (ethnicity) への配慮、再検査信頼性・予測的妥当性のための縦断的研究などへの広がりも必要であろう。

今後の発展の方向性

前節ではキャリア・セルフエフィカシー研究における問題点に付随して今後の課題を述べてきた。さらに今後の発展が期待される方向として次の3点を付け加えることができる。

研究対象者の拡大

従来の研究の対象は主に大学生が中心であった。三分野通して見ても、高校生を対象にしているものはAhrens & O'Brien (1996), Carns et al. (1995), Hannah & Kahn (1989), Kelly (1993), Matsui & Onglatco (1992a), O'Brien (1996), 浦上 (1993), 中学生を対象としているものはPost-Kammer & Smith (1985), Speight, Rosenthal, Jones & Gastenveld (1995) くらいである。社会人を対象とした研究は、大学教員 (Hackett et al., 1985; Landino & Owen, 1988; Schoen & Winocur, 1988; Vasil, 1992), 病院職員 (Kanfer & Hulin, 1985), 保険セールス (Barling & Beattie, 1983), 女子一般職員 (Matsui & Onglatco, 1991, 1992b), 工学系研究所員及び大学職員 (Fretz et al., 1989) などの職業に少数ずつ点在している状態である。

今後、対象者を拡大するとともに、Betz et al. (1996) による大学生と社会人の同時調査や、Jones (1986), 浦上 (1994, 1996a, 1996b), 富安 (1997a) による就職後の追跡調査などの試みにも目を向ける必要があろう。先

TABLE 1 これまでの主なキャリア・セルフエフィカシー尺度^{a)}

各尺度の初出論文	尺度名 ^{b)}	尺度の項目数	信頼性 再検査法 α 係数	関連づけられた外部変数 ^{c)}	被験者数 ^{d)}	他研究での 引用回数 ^{e)}
進路選択(career choice)——職業名(occupational title)で問うタイプ——						
Betz & Hackett (1981) ^{f)}	Occupational Self-Efficacy Scale	20	—	職業興味($r=.13-.42$), 職業考慮の幅($r=.15-.46$)	235	7 ^{g)}
Wheeler (1983) ^{h)}	(occupational self-efficacy scale)	17	.73-.77	職業の好み($r=.28-.68$)	163	0
Lent, Brown & Larkin (1984)	Self-Efficacy for Technical/Scientific Fields	15	.58-.89	成績, 在籍期間 等	42	2 ^{h)}
Clement (1987) ⁱ⁾	(occupational self-efficacy scale)	20	.74	一般性自己効力($r=.42$), 職業興味, 職業考慮の程度	176	0
Rotberg et al. (1987) ^{j)}	Career Self-Efficacy Scale	15	.69-.89	職業興味($r=.42-.63$), 職業考慮の幅($r=.43-.50$)等	174	0
Hannah & Kahn (1989)	(career self-efficacy scale with prestige level)	45	—	職業の社会的評価, 男女比 等	339	0
Matsui et al. (1989) ^{k)}	Self-Efficacy in Occupations	20	—	同性モデルの有無($r=.27-.39$)等	159	1
Lent, Larkin & Brown (1989) ^{l)}	Engineering Self-Efficacy	6	—	SCII ^{m)} ($r=.16-.35$)	70	0
	Science Self-Efficacy	4	—	SCII($r=.05-.39$)	70	0
Lapan, Boggs & Morrill (1989)	Self-Efficacy Ratings of GOT	不明	—	SCII($r=.32-.64$)等	148	0
Bonett & Stickel (1992) ⁿ⁾	Career Attitude Scale	18	.74-.83	自尊心, 一般性自己効力	513	2 ^{o)}
Abdalla (1994) ^{p)}	(Arabic occupational self-efficacy scale)	14	—	CDMSE ^{q)} ($r=.16-.23$), 職業興味($r=.71-.74$)等	329	0
進路選択(career choice)——職業内容(occupational task)で問うタイプ——						
Lent, Brown & Larkin (1986)	Strength of Self-Efficacy for Academic Milestones	11	—	Lent et al. (1984)の ER-S ^{r)} ($r=.52$)等	105	1
Matsui & Tsukamoto (1991) ^{s)}	Self-Efficacy for Work Activities (Holland model)	60	—	30の職業名に対する自己効力	259	2
Rooney & Osipow (1992)	(task specific occupational self-efficacy scale)	230	—	Betz & Hackett (1981)の自己効力尺度項目($r=.04-.66$)	201	0
Whiston (1993) ^{t)}	The People Task Self-Efficacy Scale	9	—	現在の職業	191	0
	The Thing Task Self-Efficacy Scale	8	—	現在の職業	191	0
Lenox & Subich (1994)	(Holland model self-efficacy scale)	30	—	SII ^{m)} ($r=.62-.68$)	180	0
Betz, Harmon & Borgen (1996)	Skills Confidence Inventory (Holland model)	60	—	1985 SII($r=.39-.74$), 1994 SII($r=.14-.69$)	2,036	0
Lucas et al. (1997) ^{u)}	Kuder Task Self-Efficacy Scale	30	.64-.87	自尊心($r=.00-.26$), KOIS ^{v)} ($r=.26-.76$), CDMSE($r=.10-.21$)	408	0
Tracey (1997)	(spherical model self-efficacy scale)	224	.35-.82	自尊心($r=.56$), 興味(職業名: $r=.57$; 職業内容: $r=.63$)等	447	0
進路選択過程(career choice process)						
Taylor & Betz (1983) ^{w)}	Career Decision-Making Self-Efficacy Scale	50	—	進路不決断($r=-.40$)	346	27 ^{x)}
Pickering et al. (1992) ^{y)}	Career Planning Confidence Scale	40	—	自尊心($r=.33-.47$)等	—	0
浦上 (1993)	進路選択に対する自己効力尺度	40 ^{y)}	—	進路成熟態度尺度	71	5
Solberg et al. (1994) ^{z)}	Career Search Efficacy Scale	35	—	CDMSE($r=.48-.73$), 対人関係($r=-.54-.22$)等	192	1
古市 (1995) ^{aa)}	進路決定効力感測定尺度	32	—	職業忌避的傾向, 職業の同一性地位	652	0
富安 (1997a) ^{ab)}	大学生用進路決定自己効力尺度	54	—	一般性自己効力($r=.46$), 進路決定行動	458	1
進路適応(career adjustment)						
Barling & Beattie (1983)	(insurance sales self-efficacy scale)	46	—	電話回数, 契約数, 売上総額	297	0
Jones (1986) ^{ac)}	(starting a new job self-efficacy scale)	8	—	社会化方略, 役割位置づけ	102	0
Betz & Hackett (1987) ^{ad)}	(agentic behaviors self-efficacy scale)	18	—	対処行動力($r=.00-.60s$)	109	0
Landino & Owen (1988)	Measure of Self-Efficacy in Academic Tasks	31	—	女性比率, 大学の責任等	162	0
Schoen & Winocur (1988) ^{ae)}	Academic Self-Efficacy Scale	78	.83-.98	遂行頻度($r=.29-.68$)	353	1
Speight et al. (1995) ^{af)}	Medical Career Self-Efficacy Scale	23	—	—	35	0

- a) 尺度の記載は各カテゴリごとに年代順とした。 b) 尺度名が明確に記載されていないもの、尺度の特徴を十分表現していないものには括弧内に注釈をつけた。
c) 変数が多い場合は代表的なものに限る。括弧内は当該自己効力尺度との相関係数。
d) 2つ以上の標本集団が含まれているものは、スペースの都合上総数を表示している。
e) 本論文の文献リストに含まれる研究内に限る。 f) 論文中に尺度項目内容の完全な記載があるもの。
g) Taylor & Popma (1990)にて妥当性の検討あり。 Kelly (1993)にて項目分類の再検討あり。 h) Lent, Brown & Larkin (1986)にて妥当性の検討あり。
i) SCII=Strong-Campbell Interest Inventory. j) Stickel & Bonett (1991)にて初期研究あり。
k) CDMSE=Career Decision-Making Self-Efficacy Scale (Taylor & Betz, 1983). l) ER-S=Strength of self-efficacy to complete Educational Requirement.
m) SII=Strong Interest Inventory. n) KOIS=Kuder Occupational Interest Survey.
o) Robbins (1985), Taylor & Popma (1990)等にて妥当性の検討あり。 p) 浦上 (1995a)にて30項目に改訂。信頼性・妥当性の検討、項目内容の記載あり。

に述べた社会・認知的進路理論を実証していくためにも、長期的な視野での研究が望まれる。

進路指導への実践的応用

これまで蓄積されてきた知見も、実際の進路指導・進路カウンセリングの場面で十分に活用されているとは言いきれない。しかし、三分野に沿って言えば、まだ自分自身でも進路の志向がつかめていない状態、進路の候補はいくつかあるものの決断できないでいる状態、大体の進路は決めているものの具体的な行動に移せない状態などへの対応、また一応決めた進路にうまく適応できるかどうかの確認などに活かせると考えられる。

具体的な応用例として、Isaacson & Brown (1997) は、カウンセリングの面接場面でクライアントに進路選択に対する自己効力の程度を口頭で数値で表現してもらい、カウンセラーがそれをひとつの手がかりとすることを提案している。

また、既存の尺度を面接場面で用いることも考えられる。Rotberg et al. (1987) の尺度は項目数も少なく、男性中心、男女半数、女性中心とされる職業を押さえてある。この尺度をクライアントに提示すると、職業に対する性別の固定観念の壁から抜けきれずにいるかどうかを知る手がかりにもできる (Isaacson & Brown, 1997)。

Brown & Lent (1996) は、社会・認知的進路理論の見地から、自己の潜在的可能性にそぐわない自己効力や結果期待を持ち、職業選択の可能性を縮めているクライアントに対しては、選択の可能性を広げること、何らかの障害のために興味のある職業を選択しようとしなないクライアントに対しては、その障害を克服すること、過去のうまくいかなかった経験によって自己効力が低いクライアントに対しては、過去の経験を視点を変えて見直す作業により自己効力や結果期待を高めること、の3点を重視している。この3番目については、自己効力に直接影響を与えられている4つの要因のうち“遂行行動の達成”を変形させたものと考えられる。進路選択は機会そのものが少なく、過去に成功体験を得たことがあるとは限らないからである。Betz (1992b) はこの要因のみならず他の3要因(代理的経験、言語的説得、情動的喚起)も各々強化するようなカウンセリングを提案している。

実際には、進路選択過程に対する自己効力を高める試みがいくつか報告されている。代理的経験の要因に着目したものでは、女性に対して伝統的に男性中心であった様々な分野で成功している女性の例を集めたビデオを見せると、その後自己効力が高まりを見せた

(Foss & Slaney, 1986)。似た例として、コンピュータによる進路ガイダンス・システム DISCOVER の体験後に自己効力の上昇が見られた (Fukuyama, Probert, Neimeyer, Nevill & Metzler, 1988)。また、言語的説得の要因に着目したものでは、自らの進路発達について外的な自己統制感 (locus of control) を持つ人に対して、進路選択での成功を努力や忍耐に帰属させることを強調するビデオを見せると、自己効力が高まることが確認されている (Luzzo, Funk & Strang, 1996)。その他にも、アメリカで中学生を対象に行われた3日間の医学体験プログラムで医学に対する自己効力が上昇することが確認されたが (Speight et al., 1995)、これなどは進路適応に対する自己効力を高める試みと言えよう。今後の進路指導場面での更なる応用が期待される。

進路適応研究の充実

最後に、進路適応への自己効力についての研究の充実の必要性を強調しておきたい。この分野についての研究の蓄積は日本はもとよりアメリカでもまだ少なく、体系化された認識ができていない。しかも日本には、アメリカでは転職が比較的容易であることと対照的に、一度進路を決めてしまうと転向しにくいという特殊な面がある。そういった状況では特に、進路決定前にも後にも考慮されるべき要因のひとつとして自己効力が一役を担うであろうこと、少なくとも何らかの補助手段になるであろうことは十分考えられる。

まとめ

日本国内において自己効力理論の応用研究は既に多くの分野で見られるようになったが、進路に関する自己効力の研究となると、主な研究成果は本論文で取り上げたものに限定されている。アメリカでキャリア・セルフエフィカシー研究が盛んであることの背景には進路についての多種多様な選択肢があり、個人個人に適した選択をするための支援情報が必要とされてきたからだと思われる。一方日本では、可能な進路の選択肢が少なく、その決定を支援する情報も限られている。従って進路選択に対する自己効力の形成も、その限られた情報(例えば予備校の提供する偏差値情報など)に依存する度合いが強くなり、より広い視野に立った自己効力の形成が阻害されてきたと考えられる。今後高校カリキュラムの多様化の時代を迎え、日本でも当事者自身による進路選択の機会がこれまでより拡大すると見られる。こうした進路に関する自己効力の研究はますますその重要性を増すことになるであろう。今後、日本において、進路選択にまつわる日本独自の風土というものを十分視野に入れた実証的なキャリア・セルフエ

フィカシー研究が進められていくことが期待される。

引用文献

- Abdalla, I.A. 1994 Relationships of career self-efficacy and personality variables with status of academic and career choice among Arab students. *Psychological Reports*, **75**, 1571—1582.
- Abdalla, I.A. 1995 Sex, sex-role self-concepts and career decision-making self-efficacy among Arab students. *Social Behavior and Personality*, **23**, 389—402.
- Ahrens, J.A., & O'Brien, K.M. 1996 Predicting gender-role attitudes in adolescent females. *Psychology of Women Quarterly*, **20**, 409—417.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191—215.
- Bandura, A. 1986 *Social foundations of thought and action : A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall.
- Barling, J., & Beattie, R. 1983 Self-efficacy beliefs and sales performance. *Journal of Organizational Behavior Management*, **5**(1), 41—51.
- Bergeron, L.M., & Romano, J.L. 1994 The relationships among career decision-making self-efficacy, educational indecision, vocational indecision, and gender. *Journal of College Student Development*, **35**, 19—24.
- Betz, N.E. 1992a Career assessment : A review of critical issues. In S.D.Brown, & R.W.Lent (Eds.), *Handbook of counseling psychology*. 2nd ed. New York : John Wiley & Sons. Pp.453—484.
- Betz, N.E. 1992b Counseling uses of career self-efficacy theory. *The Career Development Quarterly*, **41**, 22—26.
- Betz, N.E., & Hackett, G. 1981 The relationship of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in college women and men. *Journal of Counseling Psychology*, **28**, 399—410.
- Betz, N.E., & Hackett, G. 1983 The relationship of mathematics self-efficacy expectations to the selection of science-based college majors. *Journal of Vocational Behavior*, **23**, 329—345.
- Betz, N.E., & Hackett, G. 1986 Applications of self-efficacy theory to understanding career choice behavior. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **4**, 279—289.
- Betz, N.E., & Hackett, G. 1987 Concept of agency in educational and career development. *Journal of Counseling Psychology*, **34**, 299—308.
- Betz, N.E., Harmon, L.W., & Borgen, F.H. 1996 The relationships of self-efficacy for the Holland themes to gender, occupational group membership, and vocational interests. *Journal of Counseling Psychology*, **43**, 90—98.
- Blustein, D.L. 1989 The role of goal instability and career self-efficacy in the career exploration process. *Journal of Vocational Behavior*, **35**, 194—203.
- Bonett, R.M. 1994 Marital status and sex : Impact on career self-efficacy. *Journal of Counseling and Development*, **73**, 187—190.
- Bonett, R.M., & Stickel, S.A. 1992 A psychometric analysis of the career attitude scale. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, **25**, 14—26.
- Brown, S.D., & Lent, R.W. 1996 A social cognitive framework for career choice counseling. *The Career Development Quarterly*, **44**, 354—366.
- Bush, J.V., Powell, N.J., & Herzberg, G. 1993 Career self-efficacy in occupational therapy practice. *The American Journal of Occupational Therapy*, **47**, 927—933.
- Carns, A.W., Carns, M.R., Wooten, H.R., Jones, L., Raffield, P., & Heitkamp, J. 1995 Extracurricular activities : Are they beneficial ? *TCA Journal*, **23**(2), 37—45.
- Clement, S. 1987 The self-efficacy expectations and occupational preferences of females and males. *Journal of Occupational Psychology*, **60**, 257—265.
- Farr, J.M. (Ed.) 1993 *The complete guide for occupational exploration*. Indianapolis, IN : JIST Works.
- Fassinger, R.E. 1990 Causal models of career choice in two samples of college women. *Journal of Vocational Behavior*, **35**, 194—203.

- nal of Vocational Behavior*, **36**, 225—248.
- Foss, C.J., & Slaney, R.B. 1986 Increasing nontraditional career choices in women : Relation of attitudes toward women and responses to a career intervention. *Journal of Vocational Behavior*, **28**, 191—202.
- Fouad, N.A., & Smith, P.L. 1996 A test of a social cognitive model for middle school students: Math and science. *Journal of Counseling Psychology*, **43**, 338—346.
- Fretz, B.R., Kluge, N.A., Ossana, S.M., Jones, S.M., & Merikangas, M.W. 1989 Intervention targets for reducing preretirement anxiety and depression. *Journal of Counseling Psychology*, **36**, 301—307.
- Fukuyama, M.A., Probert, B.S., Neimeyer, G.J., Nevill, D.D., & Metzler, A.E. 1988 Effects of DISCOVER on career self-efficacy and decision making of undergraduates. *The Career Development Quarterly*, **37**, 56—62.
- 古市裕一 1995 青年の職業忌避的傾向とその関連要因についての検討 進路指導研究, **16**, 16—22.
- Gianakos, I. 1995 The relation of sex role identity to career decision-making self-efficacy. *Journal of Vocational Behavior*, **46**, 131—143.
- Gianakos, I. 1996 Career development differences between adult and traditional-aged learners. *Journal of Career Development*, **22**, 211—223.
- Gottfredson, G.D., & Holland, J.L. 1996 *Dictionary of Holland occupational codes*. 3rd ed. Odessa, FL : Psychological Assessment Resources.
- Hackett, G., & Betz, N.E. 1981 A self-efficacy approach to the career development of women. *Journal of Vocational Behavior*, **18**, 326—339.
- Hackett, G., Betz, N.E., & Doty, M.S. 1985 The development of a taxonomy of career competencies for professional women. *Sex Roles*, **12**, 393—409.
- Hackett, G., Lent, R.W., & Greenhaus, J.H. 1991 Advances in vocational theory and research : A 20-year retrospective. *Journal of Vocational Behavior*, **38**, 3—38.
- Hackett, G., & Watkins, C.E., Jr. 1995 Research in career assessment : Abilities, interests, decision making, and career development. In W.B. Walsh & S.H. Osipow (Eds.), *Handbook of vocational psychology : Theory, research, and practice*. 2nd ed. Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates. Pp.181—215.
- Hannah, J.S., & Kahn, S.E. 1989 The relationship of socioeconomic status and gender to the occupational choices of grade 12 students. *Journal of Vocational Behavior*, **34**, 161—178.
- Isaacson, L.E., & Brown, D. 1997 *Career information, career counseling, and career development*. 6th ed. Needham Heights, MA : Allyn and Bacon.
- Jones, G.R. 1986 Socialization tactics, self-efficacy, and newcomers' adjustments to organizations. *Academy of Management Journal*, **29**, 262—279.
- Kanfer, R., & Hulin, C.L. 1985 Individual differences in successful job searches following lay-off. *Personnel Psychology*, **38**, 835—847.
- Kelly, K.R. 1993 The relation of gender and academic achievement to career self-efficacy and interests. *Gifted Child Quarterly*, **37**, 59—64.
- Landino, R.A., & Owen, S.V. 1988 Self-efficacy in university faculty. *Journal of Vocational Behavior*, **33**, 1—14.
- Lapan, R.T., Boggs, K.R., & Morrill, W.H. 1989 Self-efficacy as a mediator of investigative and realistic general occupational themes on the Strong-Campbell Interest Inventory. *Journal of Counseling Psychology*, **36**, 176—182.
- Lenox, R.A., & Subich, L.M. 1994 The relationship between self-efficacy beliefs and inventoried vocational interests. *The Career Development Quarterly*, **42**, 302—313.
- Lent, R.W., & Brown, S.D. 1996 Social cognitive approach to career development : An overview. *Career Development Quarterly*, **44**, 310—321.
- Lent, R.W., Brown, S.D., & Hackett, G. 1994 Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice, and performance [Monograph]. *Journal of Vocational Behavior*, **45**, 79—122.
- Lent, R.W., Brown, S.D., & Larkin, K.C. 1984

- Relation of self-efficacy expectations to academic achievement and persistence. *Journal of Counseling Psychology*, **31**, 356—362.
- Lent, R.W., Brown, S.D., & Larkin, K.C. 1986 Self-efficacy in the prediction of academic performance and perceived career options. *Journal of Counseling Psychology*, **33**, 265—269.
- Lent, R.W., Brown, S.D., & Larkin, K.C. 1987 Comparison of three theoretically derived variables in predicting career and academic behavior : Self-efficacy, interest congruence, and consequence thinking. *Journal of Counseling Psychology*, **34**, 293—298.
- Lent, R.W., & Hackett, G. 1987 Career self-efficacy: Empirical status and future directions [Monograph]. *Journal of Vocational Behavior*, **30**, 347—382.
- Lent, R.W., Larkin, K.C., & Brown, S.D. 1989 Relation of self-efficacy to inventoried vocational interests. *Journal of Vocational Behavior*, **34**, 279—288.
- Lucas, J.L., Wanberg, C.R., & Zytowski, D.G. 1997 Development of a career task self-efficacy scale : The Kuder task self-efficacy scale. *Journal of Vocational Behavior*, **50**, 432—459.
- Luzzo, D.A. 1993a Career decision-making differences between traditional and non-traditional college students. *Journal of Career Development*, **20**, 113—120.
- Luzzo, D.A. 1993b Reliability and validity testing of the career decision-making self-efficacy scale. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, **26**, 137—142.
- Luzzo, D.A. 1993c Value of career-decision-making self-efficacy in predicting career-decision-making attitudes and skills. *Journal of Counseling Psychology*, **40**, 194—199.
- Luzzo, D.A. 1995 The relative contributions of self-efficacy and locus of control to the prediction of career maturity. *Journal of College Student Development*, **36**, 61—66.
- Luzzo, D.A. 1996a A psychometric evaluation of the career decision-making self-efficacy scale. *Journal of Counseling and Development*, **74**, 276—279.
- Luzzo, D.A. 1996b Exploring the relationship between the perception of occupational barriers and career development. *Journal of Career Development*, **22**, 239—248.
- Luzzo, D.A., Funk, D.P., & Strang, J. 1996 Attributional retraining increases career decision-making self-efficacy. *The Career Development Quarterly*, **44**, 378—386.
- Luzzo, D.A., & Ward, B. E. 1995 The relative contributions of self-efficacy and locus of control to the prediction of vocational congruence. *Journal of Career Development*, **21**, 307—317.
- Mathieu, P.S., Sowa, C.J., & Niles, S.G. 1993 Differences in career self-efficacy among women. *Journal of Career Development*, **19**, 187—196.
- Matsui, T. 1994 Mechanisms underlying sex differences in career self-efficacy expectations of university students. *Journal of Vocational Behavior*, **45**, 177—184.
- Matsui, T., Ikeda, H., & Ohnishi, R. 1989 Relations of sex-typed socializations to career self-efficacy expectations of college students. *Journal of Vocational Behavior*, **35**, 1—16.
- Matsui, T., & Onglatco, M. 1991 Instrumentality, expressiveness, and self-efficacy in career activities among Japanese working women. *Journal of Vocational Behavior*, **39**, 241—250.
- Matsui, T., & Onglatco, M. 1992a Career orientedness of motivation to enter the university among Japanese high school girls : A path analysis. *Journal of Vocational Behavior*, **40**, 351—363.
- Matsui, T., & Onglatco, M. 1992b Career self-efficacy as a moderator of the relation between occupational stress and strain. *Journal of Vocational Behavior*, **41**, 79—88.
- Matsui, T., & Tsukamoto, S. 1991 Relation between career self-efficacy measures based on occupational titles and Holland codes and model environments : A methodological contribution. *Journal of Vocational Behavior*, **38**, 78—91.
- Nevill, D.D., & Schlecker, D.I. 1988 The relation of self-efficacy and assertiveness to willingness

- to engage in traditional / nontraditional career activities. *Psychology of Women Quarterly*, **12**, 91—98.
- Niles, S.G., & Sowa, C.J. 1992 Mapping the nomological network of career self-efficacy. *The Career Development Quarterly*, **41**, 13—21.
- O'Brien, K.M. 1996 The influence of psychological separation and parental attachment on the career development of adolescent women. *Journal of Vocational Behavior*, **48**, 257—274.
- Osipow, S.H. 1991 Developing instruments for use in counseling. *Journal of Counseling and Development*, **70**, 322—326.
- Pajares, F., & Miller, M.D. 1995 Mathematics self-efficacy and mathematics performances : The need for specificity of assessment. *Journal of Counseling Psychology*, **42**, 190—198.
- Pickering, J.W., Calliotte, J.A., & McAuliffe, G.J. 1992 *Career planning confidence scale*. Norfolk, VA : Old Dominion University.
- Post-Kammer, P., & Smith P.L. 1985 Sex differences in career self-efficacy, consideration, and interests of eighth and ninth graders. *Journal of Counseling Psychology*, **32**, 551—559.
- Robbins, S.B. 1985 Validity estimates for the career decision-making self-efficacy scale. *Measurement and Evaluation in Conseling and Development*, **18**, 64—71.
- Rooney, R.A., & Osipow, S.H. 1992 Task-specific occupational self-efficacy scale : The development and validation of a prototype. *Journal of Vocational Behavior*, **40**, 14—32.
- Rotberg, H.L., Brown, D., & Ware, W.B. 1987 Career self-efficacy expectations and perceived range of career options in community college students. *Journal of Counseling Psychology*, **34**, 164—170.
- Scheye, P.A., & Gilroy, F.D. 1994 College women's career self-efficacy and educational environments. *The Career Development Quarterly*, **42**, 244—251.
- Schoen, L. G., & Winocur, S. 1988 An investigation of the self-efficacy of male and female academics. *Journal of Vocational Behavior*, **32**, 307—320.
- Solberg, V.S., Good, G.E., Fischer, A.R., Brown, S. D., & Nord, D. 1995 Career decision-making and career search activities : Relative effects of career search self-efficacy and human agency. *Journal of Counseling Psychology*, **42**, 448—455.
- Solberg, V.S., Good, G.E., Nord, D., Holm, C., Hohner, R., Zima, N., Heffernan, M., & Malen, A. 1994 Assessing career search expectations : Development and validation of the career search efficacy scale. *Journal of Career Assessment*, **2**, 111—123.
- Speight, J.D., Rosenthal, K.S., Jones, B.J., & Gastenveld, P.M. 1995 Medcamp's effect on junior high school students' medical career self-efficacy. *The Career Development Quarterly*, **43**, 285—295.
- Stickel, S.A., & Bonett, R.M. 1991 Gender differences in career self-efficacy : Combining a career with home and family. *Journal of College Student Development*, **32**, 297—301.
- 竹綱誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之 1988 自己効力に関する研究の動向と問題 教育心理学研究, **36**, 172—184.
- Taylor, K.M., & Betz, N.E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63—81.
- Taylor, K.M., & Popma, J. 1990 An examination of the relationships among career decision-making self-efficacy, career salience, locus of control, and vocational indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **37**, 17—31.
- 富安浩樹 1997a 大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連 発達心理学研究, **8**, 15—25.
- 富安浩樹 1997b 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究, **45**, 329—336.
- Tracey, T.J.G. 1997 The structure of interests and self-efficacy expectations : An expanded examination of the spherical model of interests. *Journal of Counseling Psychology*, **44**, 32—43.
- 浦上昌則 1993 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連 教育心理学研究, **41**, 358—364.
- 浦上昌則 1994 女子学生の学校から職場への移行期

- に関する研究—「進路選択に対する自己効力」の影響— 青年心理学研究, 6, 40—49.
- 浦上昌則 1995a 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 42, 115—126.
- 浦上昌則 1995b 女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断—Taylor & Betz (1983)の追試的検討— 進路指導研究, 16, 40—45.
- 浦上昌則 1996a 女子短大生の職業選択過程についての研究—進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から— 教育心理学研究, 44, 195—203.
- 浦上昌則 1996b 就職活動を通しての自己成長—女子短大生の場合— 教育心理学研究, 44, 400—409.
- Vasil, L. 1992 Self-efficacy expectations and causal attributions for achievement among male and female university faculty. *Journal of Vocational Behavior*, 41, 259—269.
- Wheeler, K.G. 1983 Comparisons of self-efficacy and expectancy models of occupational preferences for college males and females. *Journal of Occupational Psychology*, 56, 73—78.
- Whiston, S.C. 1993 Self-efficacy of women in traditional and nontraditional occupations : Differences in working with people and things. *Journal of Career Development*, 19, 175—186.
- Whiston, S.C. 1996 The relationship among family interaction patterns and career indecision and career decision-making self-efficacy. *Journal of Career Development*, 23, 137—149.

謝 辞

本論文の執筆にあたりましては、東京大学大学院教育学研究科 渡部洋教授、米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校 Gary B. Stuck 教授に御指導を頂きました。心より感謝申し上げます。

(1997.11.5 受稿, '98.1.24 受理)

A Review of Career Self-Efficacy Studies

EIKO IKEDA HIROSE (Graduate School of Education, The University of Tokyo) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 1998, 46, 343—355

This study is a review of career self-efficacy studies over the past 16 years. The study, which applied Bandura's self-efficacy theory to career-related domains, was first proposed by Hackett & Betz (1981) who used self-efficacy theory to help understand women's career development. Since then, study has increased on three topics : career choice self-efficacy which refers to the degree of confidence individuals have concerning the careers they may choose, career choice process self-efficacy which refers to the amount of confidence a person has in the ways he/she makes career decisions, and career adjustment self-efficacy which refers to how much confidence individuals have that may be successful in the careers they chose. Further research is needed to verify Lent, Brown & Hackett's (1994) social cognitive career theory, to evaluate the existing career self-efficacy scales, and to emphasize individual differences rather than gender differences. More use of self-efficacy theory in career counseling, more longitudinal studies, and an increase in the number of career adjustment self-efficacy studies are also needed.

Key words : self-efficacy, occupational choice, career decision-making, career adjustment, career counseling.